様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　１５日現在

機関番号：３２６１３
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007　～　2010
課題番号：19760452
研究課題名（和文）　アンシアン・レジーム期における
ソフト・パワーとしての王権建築とその様式伝播
研究課題名（英文）　Royal Architecture at the Ancien Régime era as a soft power and the influences of its style
研究代表者　中島　智章
（NAKASHIMA　TOMOAKI）
工学院大学・工学部・准教授
研究者番号：80348862

研究成果の概要（和文）：
本研究ではヴェルサイユ宮殿研究と 16 世紀フランス建築研究という 2 本の柱からなっている。これらを対象として、ある社会･文化が生み出した「文化資源としての建築」がそれ自体独立した生命を持つソフト･パワーとして結実し、その影響が他の社会･文化にいかに及んでいくのかという点を主要テーマとした。これは様式論の再生でもあり、建築史学がなしうる貢献として、建築そのものは従としてそれを生み出した社会･文化を主とする傾向を改めて、両者のバランスを修正しようした。

研究成果の概要（英文）：
In this study which consists of two researches, i.e. French architecture in the 16th century and Versailles Palace, it is clarified that “Architecture as cultural heritage” was culminated as “soft power” with its own independent life and gave well social and cultural impacts to the other countries and regions. It is also an overall review of architectural “styles”, as Architectural historians can correct the balance of both, buildings itself and social and cultural trends that produced buildings, considered important by the historians of the other domains.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	2,900,000	630,000	3,530,000

研究分野：建築史
科研費の分科・細目：
キーワード：西洋史、美術史、建築史・意匠

１．研究開始当初の背景

平成 16 年度から同 18 年度まで、筆者は若手研究 B として研究課題「アンシアン･レジーム期の王権の文化･社会とその文化資源としての建築」を進めてきた。この研究では、17 世紀フランスという近代へと流れこむ歴史の中で重要な役を果たした国と時代の、特にそのメインプレイヤーたる王権の建築のあり方を問い、現在の建築を取巻く状況をふまえつつ、建築というジャンル=建築文化資源の持つ意義を明らかにすることをめざした。建築や都市をめぐり、20 世紀末からこのようなアプローチが建築史学だけでなくその他の学問領域でも盛

んになっている。
　しかし、建築については、一方では、ある社会の反映として現れた建築のあり方がひとつの「様式」として結実し、それ自体が絶大な「ソフト・パワー」となって、その「様式」を生んだ社会とは異なる性質を持つ社会に根付いていくという側面も見逃すべきではないと考える。たとえば、16 世紀のフランス建築がゴシック様式からルネサンス様式へと変貌を遂げていった背景には、封建制社会から絶対王政の社団社会へという漸進的な変化が非常に重要な要素として挙げられるが、それだけではなく、当時の文化的先進地域であったイタリアのルネサンス様式がフランスにとって無視しえない強大なソフト・パワーとして作用した側面も無視できない。
　同じことは 17 世紀後半のフランス、とりわけ、ヴェルサイユ宮殿の造営を舞台として、フランスが当時のイタリアの文化的覇権、さらには絶対視されていた古典古代に挑戦し、18 世紀以降、ある意味では現在にまで至る文化的中心としての地位を獲得していく背景にも見て取れる。すなわち、イタリア・バロックというソフト・パワーに対し、ある部分では影響を受け、別の部分では拒絶しながら、「フランス古典主義」(筆者の考えではこれもバロックの一種で、いわば「王権バロック」である)という独自のソフト・パワーを形成していったのである。
　そこで本研究では、前述した研究課題の核心テーマ「文化資源としての建築」を中心に据えつつも、ある社会・文化が生み出した「文化資源としての建築」がそれ自体独立した生命を持つソフト・パワーとして結実し、その影響が他の社会・文化にいかに及んでいくのかという点を主要テーマとする。

1)　　本研究の対象としては、前述した研究課題でも主要課題として取り上げたアンシアン・レジーム期のフランスの王権建築、なかんずく、ルイ 14 世時代のヴェルサイユ宮殿をフランス・バロックの精華として中心に据えることとする。ヴェルサイユ宮殿についての様々な分野における一連の諸研究は、単なる建築史学の伝統的な作品論をこえた、学際的ないわば「ヴェルサイユ学」とでもいうべき世界を形成しており、今世紀に入ってからも美術史学を中心に様々な成果があるが、建築史学からのアプローチはまだそれほどみられない。

2)　　また、16 世紀のフランス・ルネサンス建築の成立事情についての研究をもう一方の柱とする。その研究はフィリベール・ドゥ・ロルムなどの著名な建築家への作家論からのアプローチが主流であり、本研究の視点からはあまり論じられていない分野である。また、わが国においては、研究者層の厚い中世フランス建築と近代フランス建築などとくらべると、最もなおざりにされてきた時代でもある。

２．研究の目的

1)　　本研究の一方の柱としては、ヴェルサイユ城館および付属庭園に注目し、宮殿の天井画や庭園彫刻などの寓意物が意味するところを定めた当時の王権のイデオロギーとは何であったかを明らかにしながら、それら寓意物の配置計画が、庭園計画、さらには庭園と城館の間の関係構築を核とした広い意味での建築創造に対して与えた影響を探っていくとともに、同時代のイタリア・バロックがこの創造活動にどのように関わっていたのかを明らかにする。これによって、アンシアン・レジーム期の社会において建築が如何に重要な位置を占め、その文化を今に伝えるに他の文化現象にまさる役割を果していることが明白になるとともに、それが他の文化に由来するソフト・パワーの無視できない影響下にあることも論証できるだろう。

2)　　他方の柱としては 16 世紀のフランス・ルネサンス建築のなかから、ロワール側流域の城館建築(ブロワ城館など)、イタリア人の手になる城館建築(フォンテーヌブロー城館の一部など)、フランス人建築家第 1 世代が設計した城館建築(ルーヴル城館など)を取り上げる。筆者はフランス・ルネサンス建築の成立は 3 段階からなっていると理解してからである。そして、それぞれの段階において、イタリア・ルネサンス建築、および、イタリア・マニエリスム建築との関係を明らかにする。
　これはわが国の明治建築の歩みとも重なるものがあると考える。すなわち、第 1 段階では各地の大工たちが見よう見まねで西洋建築に挑戦し、いわゆる擬洋風建築を出現させ、第 2 段階ではお雇い外国人が本格的な西洋建築を教え、第 3 段階では日本人建築家たちが活躍していくという流れは、イタリア・ルネサンス建築を前にした 16 世紀フランス建築の歩みそのものでもある。ゆえに、本研究は、最終的にはわが国の近代建築の歴史を射程にとらえながら進めることになる。とはいえ、本格的な比較研究自体は本研究以後の課題とする。

３．研究の方法

1)-①　ヴェルサイユ宮殿新城館･国王のアパルトマンの天井画の図像解釈学的研究。とりわけ、フランス･ムラン近郊のヴォー=ル=ヴィコント城館、および、イタリア･フィレンツェのパラッツォ･ピッティとの比較研究。

1)-②　ヴェルサイユ宮殿の給水施設であるマルリーの揚水装置についての研究。王権顕示のシステム内への位置付け。とりわけ、リエージュ司教領(現ベルギー領内)の産業機械との比較研究。1999 年以来、研究代表者の手で関連資料･研究はほぼ収集されたが、現地で漏れはないか調査するとともに、整理･分析の作業を進める。

1)-③　ヴェルサイユ宮殿のファサード彫刻の図像解釈学的研究。1680 年以降の庭園寓意物、町側の寓意物などが対象。イタリアの例やヴォー=ル=ヴィコント城館との比較研究が中心。

1)-④　建築と諸芸術が融合する場であるヴェルサイユのスペクタクルの研究。16 世紀後半から 17 世紀にかけてのフィレンツェ宮廷のスペクタクルとの比較研究が中心。

2)-①　フランス･ルネサンス建築の第 1 段階の研究。イタリア･ルネサンス建築を前にしたフランス人石工たちの試行錯誤の過程。ルイ 12 世、フランソワ 1 世の時代のブロワ城館などが中心。

2)-②　フランス･ルネサンス建築の第 2 段階の研究。いわば「お雇い外国人」であるイタリア人建築家･芸術家たちの活躍。フランソワ 1 世、アンリ 2 世の時代のフォンテーヌブロー城館などが中心。

2)-③　フランス･ルネサンス建築の第 3 段階の研究。ピエール･レスコ、フィリベール･ドゥ･ロルム、ジャン･ビュランらフランス人建築家第 1 世代の活躍。ルーヴル宮殿レスコ棟、アネ城館、エクーアン城館などが中心。

４．研究成果

1)-①　イタリアで生まれたバロックの舞台芸術をフランス王国にもたらした舞台建築家のなかでも最も重要だといわれるカルロ･ヴィガラーニ(Carlo VIGARANI, Charles VIGARANI)とその舞台芸術を紹介し、当時のスペクタクル制作のあり方という視点から、これら「つかのまの」舞台建築のリサイクルについて明らかにした。

1)-②　ヴェルサイユ宮殿新城館の心臓部たる国王のアパルトマンの設計手法について、その天井画の図像計画と各広間の機能との関わりという観点から明らかにした。

1)-③　近世のフランス、および、低地地方(現在のベルギーを中心とした地域)における、国境地帯の軍事計画都市とフランス中枢部における政治都市＝ヴェルサイユの宮廷都市を比較し、わが国の近世都市との比較文化論的研究への足がかりを見いだした。

1)-④　ヴェルサイユ宮殿新城館の国王のアパルトマンの設計過程を明らかにする上で重要な位置を占めながら、その建設過程のどの時点で書かれたのか定説が確立されていない国王付建設局長官コルベールの書簡「ヴェルサイユ宮殿：概論」の内容を分析し、その成立時を推定するための材料を抽出した。

1)-⑤　ルイ 14 世時代のスペクタクルにおける王のイメージの表現とヴェルサイユ城館および庭園における図像計画の関わりを明らかにした。

1)-⑥　ヴェルサイユ宮殿・新城館北翼 1 階の「御湯殿のアパルトマン」、および、それを構成する各広間の名称の定まり方を当時の史料によって跡付けた。

1)-⑦　ルイ 14 世時代のヴェルサイユ城館および庭園における図像計画と新宮殿の設計手法の関わりを明らかにした。

1)-⑧　ヴェルサイユ宮殿鏡の間にも鏡を供給した王立ガラス製作所の成立の事情と、その事業が同時代の宮殿建築のインテリアに及ぼした役割を明らかにした。

2)-①　サントゥスターシュ聖堂(パリ)を例に、初期フランス･ルネサンスにおいて、イタリア・ルネサンスとゴシックがどのように融合しているのかを明らかにした。

2)-②　ルーヴル宮殿レスコ棟を例に、どのようにしてフランス・ルネサンスが完成に至ったのかを明らかにする。

2)-③　コレージュ・デ・キャトル・ナシオン(パリ)とルーヴル宮殿を例に、イタリア・バロック(の影響を受けたフランス建築)とフランス･バロックを比較し、その本質的な違いを明らかにした。

2)-④　トリア、ミュンヘンなどのドイツ・バロックがイタリア・バロックからどのような影響を受け、また、どのような独自展を持ち得たのかを明らかにした。

2)-⑤　1665 年以来、ヴェネツィアからフランスに導入されたガラス・鏡製造のノウハウが、フランスの室内装飾に及ぼした影響を明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
中島智章、「ヴェルサイユ宮殿新宮殿の設計手法－国王のアパルトマンの天井画と広間の配置をめぐって－」、『日仏文化』、査読無、79、2011 年、pp.115-130
中島智章、「ルイ 14 世時代のスペクタクルとヴェルサイユ宮殿」、『建築史攷』、査読有、巻 1、2009 年、pp.207-249
中島智章、「バロック建築のリサイクル－カルロ・ヴィガラーニの舞台建築－」、『日仏工業技術』、査読無、Tome 53, No.1、2007 年、pp.46-50

〔学会発表〕（計６件）
中島智章、「ドゥローネ＝デランドによるフランス王立ガラス製作所サン・ゴバン工場の再編成」、日本建築学会、2010 年 9 月 11 日、富山大学
中島智章、「ヴェルサイユ宮殿の御湯殿のアパルトマンの各広間の名称と装飾」、日本建築学会、2009 年 8 月 27 日、東北学院大学
中島智章、「ジャン・バティスト・コルベールの書簡－ヴェルサイユ宮殿：概論」の位置付けと解釈をめぐる諸問題」、日本建築学会、2008 年 9 月 20 日、広島大学
中島智章、「近世フランス・低地地方の軍事計画都市と宮廷都市の比較」、日本建築学会、2008 年 9 月 19 日、広島大学
中島智章、「ヴェルサイユ宮殿新城館の国王のアパルトマンと太陽神神話
－天井画と広間の間取をめぐって－」、建築史学会、2008 年 4 月 19 日、工学院大学
中島智章、「カルロ・ヴィガラーニによるテュイルリー宮殿付属劇場の舞台建築のリサイクル」、日本建築学会、2007 年 8 月 29 日、福岡大学

〔図書〕（計４件）
三宅理一、中島智章　前島美智子、武田ランダムハウスジャパン、『サンゴバン　ガラス・テクノロジーが支えた建築のイノベーション』、2010 年、247 ページ
中島智章、河出書房新社、『図説バロック　華麗なる建築・音楽・美術の世界』、2010 年、140 ページ
中島智章、河出書房新社、『図説ヴェルサイユ宮殿－太陽王ルイ 14 世とブルボン王朝の建築遺産』、2008 年、144 ページ
中島智章、河出書房新社、『図説ヴェルサイユ名建築でめぐる旅』、2008 年、136 ページ

６．研究組織
(1)研究代表者　中島　智章
（NAKASHIMA　TOMOAKI）

研究者番号：80348862